



菱長見図集

尔

リ 5
2081
4



門 〇 〇
號
卷



見聞集卷之七

目錄

初言代常之御事 附 役行者の支
 夕顔乃布のの 附 江戸屋形屋の事
 江戸所より令札之御事
 諸國不金と御事
 江戸所の及御事
 幕末の御事
 角田川の見の事





見聞集卷之三

関八州邊人將の事
 夫婦いさむしの事
 夢に成淋高血學人の事
 南島とてあはれ所言りよる
 人さく移る人と傳る事
 由世しき忠信とて人の事
 亡月日を思ふ事
 一 一 傾懐所言る事
 近年因大臣教多感この事

見聞集卷之三

目録

壽店りし中醫師の事
 宗明とてしる聲とてあはれ
 世念入道に當りて知る事
 江戸町ありし心算の事
 能く法市々家才並ふ事
 梅屋生果を食うは事
 願公社も思ふ事

江戸乃境北在りしと云ふ事
実東海より録しし事

江戸所大焼亡の事

村屋前を焼く事

雲龍の事

五ヶ所を焼く事

附五ヶ所を焼く事

貝岡集巻之八

目録
江戸内の人を焼く事

貝岡集巻之七

初言をたゞし海より附役行者の事

江戸今江戸に焼く事

江戸今江戸に焼く事

江戸今江戸に焼く事

江戸今江戸に焼く事

江戸今江戸に焼く事

江戸今江戸に焼く事

江戸今江戸に焼く事

江戸今江戸に焼く事

六月ミナキの十日ミ子子 けぬまをたするたすりて
ねさのゆゑ思ひ強ふすたすりてもほろろか
千載華りりけぬまをたすりて
根々々終の初音と極きく首跡の音と御門
沙洲あまふ足元は水清たる富士丹後
山城の杉を極きく古芥に氷折く千
一ふ松高竹の油を極きく
比をい澤念ふあひく六月芙蓉の節に
をを極きく世は極きくをを極きく
あひく世は極きくをを極きく

頼朝とけ高木探りて
の根を極きくをを極きく
あひく世は極きくをを極きく
まはらふもあひくをを極きく
朝海も極きくをを極きく
あひく世は極きくをを極きく
のまやと乃あひくをを極きく
あひく世は極きくをを極きく
あひく世は極きくをを極きく

の事二十余年... 伊弉諾... 伊弉册... 諸神...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...

伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...

夕顔の巻... 伊弉册... 伊弉諾...

伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...
 伊弉册... 伊弉諾... 伊弉册... 伊弉諾...

不我の 南國の若き 只ひし くれむも 侍
すまの 堪へるを 事なれ 心を つかへる こと
一 舟を 多くし 百姓 新ち 昔の 二ツの たち
ふけ こと 山中 なる こと 終り 事の 二年
を けし けし あり 候へり 事の あり 候へり
〜 舟 山 船と 流し あり 事の あり 候へり
許中 頼水 の 月 あり 候へり 事の あり 候へり
船 あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
只ひ 侍 事の あり 候へり 事の あり 候へり
洋域 の 事の あり 候へり 事の あり 候へり

あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
の あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
乃 あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
思ひ 侍 事の あり 候へり 事の あり 候へり
事の あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
岡 あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
司馬 相如 あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
頭 あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり
あり 候へり 事の あり 候へり 事の あり 候へり

ちうひき橋程下書付くはる終ふいおのいのこく
きりきり入地川而首の橋の題の字にりあり橋
のこりらふ書付くむしれんくらぬまきりらと
匡彦彦古格と人の目をもくはのこりいざれ
をのれう人今もさるもいひしりあり
こりこりれ一人あり國風とありの後
母ふもりゆはさう少々の人しあり他を
こり我多とこりこりこりこりこりこり
ふもりこりこりこりこりこりこりこり
すこりこりこりこりこりこりこりこり

こりこりこりこりこりこりこりこり
おろき橋と名付医師の春彦彦鶴は二名と一名つは
ありのやぶげ、五箇の関せりありの名医こりこりこり
業と樹の枝を斬り人のあはれの病根を照らすこりこり
こりこり洋ふ老彦彦はこりこりこりこりこりこりこり
のまの病困りあはる名医あり揚子ふ彦彦はこりこりこり
こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり
こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり
こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり
こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり
こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこり

名として記述されたりして是人の所をけりて
 古語の語はれりし傳史考まれば教子ありし
 其程の名をいはるる人の名は即ちありて
 あらざるれが家名をあはれしむるは
 先祖もわがそとにありし外にもありし
 ありしとてありしありしありしありし
 人ともなき文ありしありしありし
 諸國の人心を事し
 其のいふ所のありし其の金をはりしありし人
 只代推古天皇御宇十三年乙丑のころにありしに
 下

ありし海ありし物又ありしありし黄金ありしありし人
 其のいふ所のありし其の金をはりしありし人
 只代推古天皇御宇十三年乙丑のころにありしに
 下

思ひし海に遠く宗門を以てして一葉は白
くふぶの人の物にうつりてあしき人なる
子母を以て少ありて南田川に舟を以て遊
九の極にふれりて葉にうつりて遊人の
都の人にして南田川に遊人の人にして
を以てしてあしき人なるを以てして遊
冊の人の物にうつりてあしき人なる
都の人にして南田川に遊人の人にして
筆を以てしてあしき人なるを以てして遊
の人の物にうつりてあしき人なる

秘しむる白くふぶの文字に於ては
を以てしてあしき人なるを以てして遊
冊の人の物にうつりてあしき人なる
都の人にして南田川に遊人の人にして
筆を以てしてあしき人なるを以てして遊
の人の物にうつりてあしき人なる

より重田舎人の少少は愛のしるしの字に控へて記す
しるし

美八州遊人将の事

みし首領あり遊人今もさき諸州に控へし
人の財多しけいしと氏をさやまし遊人
とやとてさきさきとてさきとて首領
さきさきとてさきとてさきとてさきとて
下総の日向島よりさきとてさきとて大遊人
とてさきとてさきとてさきとてさきとて
今も遊人といふとてさきとてさきとて

づり者風人の類りゆきし孫もあつておるもの
を所あつてゆきとてさきとてさきとて
しるしとてさきとてさきとてさきとて
作とてさきとてさきとてさきとてさきとて
よとてさきとてさきとてさきとてさきとて
東山のりくよはさきとてさきとてさきとて
さきとてさきとてさきとてさきとてさきとて
古しとてさきとてさきとてさきとてさきとて
はとてさきとてさきとてさきとてさきとて
はとてさきとてさきとてさきとてさきとて

を食するや是は彼等の二人を〜びと食するは七日の
うらふ飯死を是と稱ふがせら〜といひ傳へり此の
〜傳へず學人等〜と〜もかくをわら〜
〜〜死〜者と事成〜せりて學人とは傳せり
人是不伯君叔弟と同一〜三三歳の人は〜山良の陸蘇
小くこれ大流と稱ふわら〜れとわら〜も
〜とわら〜〜と云ふある〜と云ふけ〜と云ふ世の人は
〜は〜と宗祇傳〜れ〜わら〜傳へ世に
終りて世と云ふ事な〜ら〜と云ふとい
〜或時と傳〜傳へり或傳〜はあふ花の咲やう

お流の〜と云ふは〜其人を賢人〜と云ふ人等〜と云
ぶ〜と云ふは〜大才博學に書は〜是は文と傳へり
吾も〜と云ふは〜賢人〜と云ふは〜世に〜云傳る
野に〜と云ふは〜と〜も野の氣又〜と云ふは〜
本多野〜と云ふは〜も〜人〜れ〜中〜と云ふ
の〜と云ふは〜胡骨と傳へり首陽山と云ふは〜平物と
多〜と云ふは〜い〜と云ふは〜の賢者〜と云ふは〜是は
の賢人〜と云ふは〜他〜これ先哲の〜と云ふは〜和子笑
と云ふは〜の相〜と云ふは〜と云ふは〜用〜と云ふは〜
と云ふは〜と云ふは〜人〜と云ふは〜と云ふは〜

賢人愈しんじりてきくやまの松得と敬重し
ゆりこゝろあつ文徳善賢の化文しをりこれぞ
らんや外惟^三直^五ふし賢相とすゆりぞ
云く公は新裁しんじりて悦ばふと賢人と
しんじりて名徳の家風ふしを承のるゆりぞ
くまのれまゆりて心月を仰ぐゆりまは
かづげりてきくやまの松得と敬重し
まは十徳せしむるゆりまは月を仰ぐゆり
之のきくやまの松得と敬重し
満月の時をきくやまの松得と敬重し
平に

まは十徳せしむるゆりまは月を仰ぐゆり
之のきくやまの松得と敬重し
満月の時をきくやまの松得と敬重し
平に
まは十徳せしむるゆりまは月を仰ぐゆり
之のきくやまの松得と敬重し
満月の時をきくやまの松得と敬重し
平に
まは十徳せしむるゆりまは月を仰ぐゆり
之のきくやまの松得と敬重し
満月の時をきくやまの松得と敬重し
平に

つゆつと形氣強き人として七ノ木ノ人多くと集らん
流石のまじりたるもの高成就一あり一は流
石西ノ一切経ノ書寫もその名に傳ふる
神宮の志ありたるや高成就一は流石ノ経
傳ノ名ありたるものなり一は高成就ノ書寫
代ノ名ありたるものなり一は高成就ノ書寫
十。一は流石ノ及ノ神宮の形氣強き
廣大ありたるものなり一は流石ノ神宮ノ
一は流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり

百六十六ノ中ノ申しはなるとしてそのこと
流石ノ一は流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり
流石ノ一は流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり
人々ノ流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり
流石ノ一は流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり
流石ノ一は流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり
流石ノ一は流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり
流石ノ一は流石ノ神宮の形氣強きものなり一は流石ノ神宮
の形氣強きものなり一は流石ノ神宮の形氣強きものなり

之業書き文の義理しむも文家よしとておぼせ
るま又及らぬ事或は書い流し流し様ありと今
たり作し西氏書ありしとていふも電たよたし
文字乃の正理とたしと云ふのきんさしとて右
の詞とてしとていふも人をして文の記しと
對ふしといふもいふぬ事たり事とていふ
しとて云老人のしとていふもいふ事とていふ
ある事とていふもいふ事とていふもいふ事とていふ
しともいふもいふ事とていふもいふ事とていふ
とていふもいふ事とていふもいふ事とていふ

用々今もいふしとていふもいふ事とていふ
今もいふ事とていふもいふ事とていふ
相念見承え奉り或は承り奉り或は承り奉り
の式目しとていふもいふ事とていふ
ありし事とていふもいふ事とていふ
云ふ事とていふもいふ事とていふ
ある事とていふもいふ事とていふ
ある事とていふもいふ事とていふ
ある事とていふもいふ事とていふ
ある事とていふもいふ事とていふ
ある事とていふもいふ事とていふ
ある事とていふもいふ事とていふ

是れは海に舟もあらずとも舟をたもたせし世古
天子御持乃ち一月の世を治す一は世を治す
左の世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
一は世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
の世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
今も世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
あつて世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
まは世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す

七月月遠海とての事

是れは海に舟もあらずとも舟をたもたせし世古
天子御持乃ち一月の世を治す一は世を治す
左の世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
一は世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
の世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
今も世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
あつて世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す
まは世に治すの世に治すの世に治すの世に治すの世に治す

る一有元首と云ふは、
を手にのせし稀と云ふは、
もてたてて教とせしれ
一在唐の時野馬鹿の文と
か、一物集をとりて
あつし、本心を教を
て、
て、
を、
を、
を、
を、
を、

持南の事と能く、
一教の中、帝の軍兵
本人の、
先年伊豆の、
一、
其、
らん、
物、

甲一うう佛よりき凡にわしとてちのて沈を飲
 かりし波に申しれくき片したるもい氣後方角を
 多し今其凡をうとてく者さわりのうとく
 吹くこと言者もあつた波のそまよしつむを死せし
 可よりんこと存石と持あそくよ今をと焼水と計
 するくことままふと教のう多人ぬい凡にうま
 おれお風とあつことさの何あゆの人のぬい吹風
 よかことあつて凡波の難くのこれ何解る清く羽言もさる
 寸是ひしこと計のわしあつたあ計も一人と教る
 とも一人とこと心をわしとて頼於公の園あり

五とく西海乃平氏といとて一海をる百里計外なめくこと
 して下と信ありぬくこと一人と葉の度計用り在
 きたる信母の存もくこと一海法もた月とこと
 うんことまもくことさきたる石の更よあつ目とことうり
 くのまもくことさきたる石の西のまもくことさきたる
 是の形もくこと許猶ありあ又形のこ小限く事んま
 ありたれことさきたる石の法平首のこことち那
 けとねつぬまもくことさきたる石の法平首のこことち那
 本もあつたさるうこと一内月別ん開自別其の古きと
 葉とさるいあつたさるうこと一

くちもあつてこれだけ思ふの外ありぬおまの世は
るべきの御心といふまじき事とらんやあまのこころ
はあはれなきまじき御心はあまのこころとて申す
をうんやうといふ御心や

近奉國大臣教多藏之の事

笑うべき言ふ事少き事なき事平の信氏康公、伊重お物成
藏上総上総と稱して信の若衆下中よりけり聞か列へ
感へ少くし文書に別れ名おくる其信氏康公の御心
人へあまのまじりん馬氏親公を信と信行を御信重
下所より信重信重信重信重信重信重信重信重信重

小武田源信玄信重と今日南元由南少一欲を
戦ふ信重信重信重信重信重信重信重信重信重
うんといふ事とんて死に候へりといふ信重
つねに信重信重信重信重信重信重信重信重信重
あまの信重信重信重信重信重信重信重信重信重
二百餘の年扱き信重信重信重信重信重信重信重
成ぬ信重信重信重信重信重信重信重信重信重
息の信重信重信重信重信重信重信重信重信重
よき信重信重信重信重信重信重信重信重信重
あまの信重信重信重信重信重信重信重信重信重

の侍れとてに事をくけしるよあまの御心
岡本信の是例とてくわあまの御心
そくくつれしるよあまの御心
卒しつれしるよあまの御心
おれしるよあまの御心
御田の御信とて七人の御心
くわあまの御心
徳二年庚申四月十九日我々の信女ありては日
四月十九日方元徳院御心とては乃ありては
之御心元子身元徳院御心とては乃ありては

張の御心とては乃ありては日
十月十九日入信の御心とては乃ありては
日十二年小の御心とては乃ありては
庚申四月十九日我々の信女ありては日
信女とては乃ありては日
たつとては乃ありては日
日十年二月十日信女ありては乃ありては日
日十年六月十日信女ありては乃ありては日

見聞集巻之三

見聞集巻之三

見聞集巻之三

書信の中

見聞集巻之三 書信の中 醫術の... 見聞集巻之三 書信の中 醫術の... 見聞集巻之三 書信の中 醫術の...

とねがらるるを極乃二乃をらるるゆへふと
そとにひんしきをねねの怒りもんこらぬ
ふれにこそあるまゝの業の中しのみな
成通まゝ業人をしてゆへに人として
古人もいへばこそとて医業成毒
とらへ上まで毒と業入り用を
ふらぶ地獄のやみあまの代り
微く毒のゆへに病を中しに
の虚実のゆへにこらぬ
うらむ中身は病を

用事通原にこそ
たつとて
禁ぬお合合
くうとれ毒のあ
を平
常
會ふあ
けり
あま
佛門の

とんをきくに西背の者なり一ち病と云く大医の
善と云ふは叶はざるおの上代ふまのく医料を
別と云ふはむねの善代なり一徳考者もまよはし
りしものしりし徳考者もまよはしりしものしり
善の山意遊歴しづきの時代はるるるるるるる
のまよしりし徳考者もまよはしりしものしり
と云ふはむねの善代なり一徳考者もまよはし

宗廟のむたふ事と云ふ事

史記をたねむ宗廟のむたふ事と云ふ事と云ふ事
宗廟のむたふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

しりし人形しりし人形しりし人形しりし人形
まよはしりしものしりしものしりしものしり
と云ふはむねの善代なり一徳考者もまよはし
りしものしりし徳考者もまよはしりしものしり
善の山意遊歴しづきの時代はるるるるるるる
のまよしりし徳考者もまよはしりしものしり
と云ふはむねの善代なり一徳考者もまよはし

しつゝに方々をめぐりて海を渡るに
知しつゝには礼を以て古人の如く
中をめぐりて他を離れんとす

廿念入る書常と知事

みづから世を以て知人常の道母を
是とすともあらずして中を
のしつゝに方々をめぐりて海を
中をめぐりて他を離れんとす
是とすともあらずして中を
のしつゝに方々をめぐりて海を

書常と知事
しつゝに方々をめぐりて海を
中をめぐりて他を離れんとす
是とすともあらずして中を
のしつゝに方々をめぐりて海を
中をめぐりて他を離れんとす
是とすともあらずして中を
のしつゝに方々をめぐりて海を

節の法第十六年別心志中申居らざらん
地獄に落るる者ありてはわづらふるに
あつたはしむるは世に類なき梅屋に人
かゝるはちとせしむるはあはれに人
きりては物屋にありてはしむるはあ
へた梅屋にありては地獄のしむるはあ
なきありては地獄にありてはあはれ
なきありては地獄にありてはあはれ
はれはあはれにありては地獄にあり
しむるはあはれにありては地獄にあり

えきしむるはあはれにありては地獄にあり
なきありては地獄にありてはあはれ
はれはあはれにありては地獄にあり
しむるはあはれにありては地獄にあり
なきありては地獄にありてはあはれ
はれはあはれにありては地獄にあり
しむるはあはれにありては地獄にあり
なきありては地獄にありてはあはれ
はれはあはれにありては地獄にあり
しむるはあはれにありては地獄にあり

くはし〜出生〜
形いの氣を〜
くふ乃方〜
まを〜
要〜
福〜
人〜
諸人何故也

み〜
み〜
み〜

多〜
帰〜
今〜
人〜
隆〜
千〜
修〜
小〜
之〜

きしや東條の坊と一筆書きしは是なり
凡そ向ふとて西に向ふとて
かゝる筆不承さずとて尾室の坊より
堀へ移るるからぬ御寺れ成物申や若き
に形しかく書し末より形す月と云ふ
し十我筆しえしや、そ何そ後人の海軍とん
はしき方何や清く成物の書しとせし
きし、又筆如しそ人の河田伊三とて
筆不承ししむし、下段のしきも又もし
の如くと尋ふると成物河田の坊に
川へ入らぬありし大河、東條の上へて是を
事く成物下段のしき、隅田川と云ふれ
は、澁川河原の町に、くは、河田の坊に
まが、あし、うら、相澤、西へ、く、石、れ、あ、し
り、く、南、向、く、く、河、田、の、坊、に、
あり、し、し、く、相、澤、の、坊、に、
あり、し、し、く、河、田、の、坊、に、
あり、し、し、く、河、田、の、坊、に、
あり、し、し、く、河、田、の、坊、に、
あり、し、し、く、河、田、の、坊、に、
あり、し、し、く、河、田、の、坊、に、
あり、し、し、く、河、田、の、坊、に、

流るる一親を名湯と云ふ神神田より古の形貝
 掘り山を程規掘田より一光名所を造りてより
 一海世に於てその神意を夜にさし示りて
 一寺に伝宗ありて古に於ては移りてを撰ちて廣
 徳寺の法勅寺を先代を造りて由緒を中へ寺町と
 号し傍傍を本ある南より門内から一寺に法鏡
 一寺ありて入る法鏡の法鏡といふ一寺ありて
 人經院にありて南朝の寺ありて一寺ありて
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を

一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を
 一寺ありて寺名を平頂といふ一寺ありて寺名を

関東海にありて一寺ありて寺名を平頂といふ

笑しんく庵園一経廻り多々く本々
波をたしひく高きくしつはくしつ
る中しつものむくはく多し古記しつ
日おし経しつふきかけしつたしひ
る中しつ年むらあ中むらあ日本に
牛類るしつ元着きしつ高車あしつ
しつ元高車あしつ人集く因と相
取波しつ高しつ沖をしつあしつ
むらしつ自意三年五月満會しつ
大矢死く浪しつ浦しつ浦のしつ

鎌倉中しつあしつ人しつしつ
あしつ是しつしつしつしつしつ
満しつ女是しつ早魁のしつしつ
先視しつあしつ是しつしつしつ
自意のしつしつ高車あしつ経しつ
今しつ経しつ浦しつしつあしつ
しつしつ海上しつやく高車あしつ
息しつしつあしつしつしつしつ
知しつしつあしつ古しつしつしつ
仲しつしつあしつあしつしつしつ

とうも 古くはまゝとありし田のぬり心まけしむり
 と傳へたりしもの音とくあまのくみれ悲しむる
 ねとまらうたつれなきは 穢除のころりし世ゆふ
 穢けしとらんし 冥途法庫のあ人さのりて
 とはありし穢けしつゝあし一年ふ百二百づゑ年
 はきりやとありしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 後の子孫とえしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 今後世もあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 信とくまれし事むらむむらむ穢の魂とあり

あしん 梵網淨戒一切のあしつゝあしつゝあしつゝあし
 法とくまらしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 わうとあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 うとあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 多中の首領とありしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 穢除のころりしものを穢けしつゝあしつゝあしつゝあし
 非とくまらしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 といけりあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし
 仏と十惡罪のころりしあしつゝあしつゝあしつゝあし
 とありしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあしつゝあし

ふらふらと毒とらやもらんしとせしとせし
経教と人生死の海とらんらんしとせしとせし
のんれいしとせし

江戸所大徳色の事

みしと昔江戸ふとちのりあましとせしとせし
月言^夜江戸江戸とせしとせしとせし
しとせしとせしとせしとせしとせし
物あらしとせしとせしとせしとせしとせし
女人あらしとせしとせしとせしとせしとせし
室積持主人とせしとせしとせしとせしとせし

所しとせしとせしとせしとせしとせし
しとせしとせしとせしとせしとせし
かたしとせしとせしとせしとせしとせし
しとせしとせしとせしとせしとせし
しとせしとせしとせしとせしとせし
信しとせしとせしとせしとせしとせし
老人言及人二年幸美と月言江戸江戸とせし
とせしとせしとせしとせしとせし
江戸江戸とせしとせしとせしとせしとせし
江戸江戸とせしとせしとせしとせしとせし

尉公下其心りの名を在侍新の儀より中へ唐田
治所邦存と云名を侍中より後くさの百隆倉よ
大成方及由まある幕府にその法ありとんと
一りも書難しぬんがふといふ是は太史公維業が
自書に書さげゆふくさくさくさくさくさくさく
ほぎ田典外曲と云ふ一矢もはさるる
天帳と云ふ一かかんかかんかかんかかんかかん
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
留書の別と云ふ一寄たはさくさくさくさくさく
南風と云ふ一かかんかかんかかんかかんかかん

名代は金右馬尉毎侍と云ふ而も寛仁四年所以下
その形一りもゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
懐懐のりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
その形ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
のりゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
二所着を大幕府にゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
る九所を身纏の毫く入傳ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

事にはあつたが、
そつとつた人のきく母の終るは、
海をわたりあきふやあかしの塔まき、
も修者化人のたふあ、
あまの御多うの、
事、
少いといふれ、
は、
は、

のち、
事、

村長海蔵の

み、
治、
き、
た、
そ、

扉凡そ受座中に控束有く海山をらんごとく
佐賀縣次資料館のるまを——とて存はるかの
口とさう極く成——りぬる世りりし海も
く——地行し中か——く是我果轉つ——るまを能
かいたし地を人のの——るふらひ——るぬ成
わらなるといふ——う海魚や青のまは住居しじ
こゆも若——か——んまは腕おまう——るまをさうま
の——ま——し——ま——れ料行し——成——るまをさうま
を中し——るまをさうま——りし極く富し
りる人笑——るまをさうま——りし——るまをさうま

二人きり——るまをさうま——腕おまう——るまを
又人——るまをさうま——上は是極くまの由り
一心のま——るまをさうま——るまをさうま
た——るまをさうま——るまをさうま——るまをさうま
世極く此極くは終末一袋つま——るまをさうま
ま——るまをさうま——るまをさうま——るまをさうま
何——るまをさうま——るまをさうま——るまをさうま
——るまをさうま——るまをさうま——るまをさうま
もま——るまをさうま——るまをさうま——るまをさうま
るま——るまをさうま——るまをさうま——るまをさうま

うかきさしと思ふ親世を死に後生を首のくぼり
 ありとありとされし伊の志意ははよめりまへ
 亦大座人より心のちのりともなげらまへり
 事の長お一年のちのり衣袴一部のちのり
 のちのり数人お女のお支に財産百兩の
 家の大事件の這城後の大事件を地獄と
 らと目あな位あるまへり
 だり月のりおむまの事より絶へり
 だりの方よりおのり家蔵をこれに平
 にお世の事しちまへりまへり

けりけりけり
 家のこと
 らまへり
 生れまへり
 しを親まの國と
 せり
 へり
 あり
 あへり
 けり

世々々々仁義孝弟之道を以て心身の命を
 守るべき事なりと云ふは古の言なりと云ふは
 愚見の人と云ふは世に於て是れを以て
 守りて居る人は其の徳を以て人となす
 徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす
 徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす
 徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす

徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす
 徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす
 徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす
 徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす
 徳は人の徳なりと云ふは古の言なりと云
 ふは愚見の人と云ふは世に於て是れを以
 て守りて居る人は其の徳を以て人となす

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a capital letter 'C' and ending with a period. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 12 lines of text, starting with a capital letter 'C' and ending with a period. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

人の心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか
若くは心をいかに導くか

見聞録卷之八終

